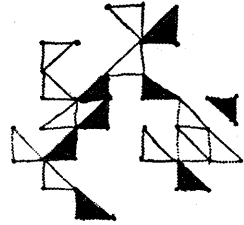


石を拾う

村田修子



朝いそがしくあたふたと園にいけば、子供たちとまたいそがしく楽しく過ごし、家に帰れば帰ったで家事に、また幼ない子供たちと賑々しくいそがしく……というわけで、普段は物事を余り深刻に考えることなく、ばたばたとしている状態のところへ、こういうテーマを頂くと、矢張り改まって考えなくてはならなくなる。といっても大したことを思いつくわけではないので、一番率直にいま自分が拾っているものについて書いてみようと思う。

いま、といっても既にふた昔も前の頃から突然石にひ

かれるようになった。「石」といえばすばらしい宝石もこう呼ばれるし、菊花石とか梅花石などの奇石などもある。けれども私のいう「石」というのは道端にころがっているただの石ころなのである。

石ころはどの地に行ってもある。だから歩いているときも、バス停でバスを待っているときでも、自分が「アレだ」と思ったときはすぐにしゃがみ込んで拾って見る。私が場所をかまわず拾うので、一緒に歩いている娘に「ママ、みつともないからやめて」と再三注告を受ける。けれど一向にその癖はやまない。ときには赤い石（ガーネットだと言われたこともある）が入っていたり、面白い形をしたのに当ることもあるので尚更やめられないのかも知れない。その結果、私の家には日本各地の小石が水盤や箱にざくざくという状態である。

そのお陰とでもいおうか京都や新潟の方には黄色い石が多かったことや、緑や赤が多いところもあることなどを、その思い出と共に思い出しては懐かしむ。だがいくら小石といっても重みのあるもの、旅行先の一箇所で少しずつ拾っても荷物の重みは加わるばかり、家に帰ってあけてみると、ほうぼうから、さらさら、カッチン、

ごろごろ、というように出てくる。それをみんな洗って水盤やお皿に入れて裏返しにしてみたり、隣との配色を考えて動かしてみたり重ねてみたり、ひとしきり眺め、通ってきたときを振り返る。

こうして石は次第にふえてゆく。

その石の一番美しい姿は、何といっても水の中に放ったときの色である。だから箱に入れて置いたものの表面が乾いていると可愛想に思えてくるので、時折、水盤に入れて机の上に置き、また花の代りに眺めて楽しむ。

お茶の水の幼稚園の庭は、日本中を探してもここだけではないか、と思うのだが、一面に小砂利が敷かれています。私が奉職したての頃は、ざくざく、と足がめり込む程厚く敷かれていた。グラウンドは、アンツーカーと迄はいかなくても凹凸のない土でできた平坦な場所、と思いつ込んでいた私にとって驚き以外の何物でもなかった。けれどそこに住んでみると、案外怪我はしないし、雨が降っても、やみさえすればすぐに庭に出ることもできる。歩いたり走るときに砂利が崩れてキックがきかないことも、「困ったこと」というよりは次第に、「バネの力をつけることにつながる」と思うようになった。

このように庭中に石があるから、ここでもよく私は石拾いをする。だから洋服を着替えるときなどよく職員室の床にばらまいて、恥かしい思いをする。多かれ少なかれこの影響を子供たちは受けているらしく、よく石を拾ってビニールの袋に入れて、集めたり、水を入れて眺めている。最近では自然物などを集めて楽しむ、ということが余りできなくなっているときだけに、これにも意味を見出している。「これをしましう」といってみんなでするわけではなくても、子供の周りにいる者の影響を知らないうちに受けていることをひしひしと感じるし、また大変なことだと改めて思う。

或るとき小学校の二年生になった子が放課後立ち寄って、「昨日の遠足で川原に行ったら石がたくさんあったので、先生が石が好きだったのを思い出して、亀の形をした石が見つかったからお土産に持ってきた」というのである。T君と庭で一緒に石を拾った覚えはないけれども、私のしていることをちらりと見ていたこと、それを思い出してくれたことに大変感激した。と同時になんでもうっかりとやることはできないことを痛感した。その亀石は、時折り水を得てその中でじっとしている。